「葉公好龍」考

On the 'Shè Gōng Hào Lóng'

松尾善弘
Yoshihiro MATSUO

（一九九三年九月二〇日　受理）

まえがき

「葉公好龍（セフコウリョウヲコノム）」。『大漢和辞典』によると、「似て非なこと。又、名を好んで実を好まない喩」とある。「葉公」については、「春秋、楚の人。葉子高をいふ。即ち沈諸梁。菜を葉県に食み、よって葉公を僭称す」とあり、以下「葉公」の来歴出典個所が列記してある。

いま、この葉公に焦点をあて、孔子との関わりの中でその人となりを考察し、この故事成語の意味も究明しようと思う。

一

漢の劉向撰『新序』10巻雑事五に「葉公好龍」由来の本文がある。

子張見魯哀公、七日而哀公不礼。託僕夫而去曰、臣聞、君好士、故不遠千里之外、犯霜露、冒塵垢、百舎重趼不敢休息以見君、七日而君不礼。君之好士也、有似葉公子高之好龍也。葉公子高好龍、鈎以寫龍、鑿以寫龍、屋室雕文以寫龍。於是天龍聞而下之、窺頭於牖、施尾於堂。葉公見之、棄而還走、失其魂魄、五色無主。是葉公非好龍也、好夫似龍而非龍者也。今臣聞君好士、故不遠千里之外以見君、七日不礼。君非好士也、好夫似士而非士者也。詩曰、中心藏之、何日忘之。敢託而去。

〈通釈〉子張（春秋、魯の人、孔子の弟子）が魯の哀公に会見を求めた。七日経ったが哀公は礼遇しない（つまりお目通りがかなわない）。そこで子張は僕夫に次のように伝言を託して立ち去った。私めは殿様が士を好むと聞き、千里の道を遠しとせず、霜露を犯し、塵垢を冒し、長い道のりのため足だこを作っても休みもしないで殿様に会見に及ぼうとやって参りました。ところが殿様は七日経って

も私を士として礼遇して下さいません。殿様の士を好むという話はさしずめ葉公子高の龍を好む話に似てはおりますまいか。葉公子高は龍が好きで帯鈎（おびどめ）に龍を画かせ、鑿落（さかずき）にも龍を画かせ、部屋中に彫刻して龍を画かせていました。そこで天龍がそれを聞きつけて下りてきて、頭を牖（まど）にもたせかけ、尻尾を堂（表座敷）に曳きずったところ、葉公はそれを見て、手にした物を放り出して逃げ回り、肝っ玉は消え失せ顔面蒼白の態でありました。このことは葉公は本当に龍が好きなのではなく、かの龍に似て龍に非ざるものが好きだったということを表わしています。今私めは殿様が士を好むと聞き、千里の道を遠しとせず会見にやって参りましたが、七日経ってもお目通りをかなえて下さいません。どうやら殿様も本当には士を好むというのではなく、士に似て士に非ざる者を好むということのようです。『詩経』にも言っております、中心之を藏（よみ）すれば、何の日にか之を忘れんと（後述）。いま思いきって僕夫にこのことばを伝えてくれるように頼み、立ち帰ることに致します。

似而非の、物事の表層的認識で振舞っていた葉公が、真実の、物事の深層における事実に直面して茫然自失したという物語りである。子張はこのエピソードを例えにして、哀公の士好みも所詮外面を飾るみせかけのもので、真に高潔の士を探し求めているものではないことを語ったもののようである。

とすれば、葉公の行動はみかけだおしであり、物事の表面だけを見て実体・本質を見ようとしない、或いは真実の前ではなすすべを知らない軽率な行為者として非難した話であるといえようか。

極言すれば、上べだけを取りつくろい、世論ばかりを気にして、厳正なる現実の前では右往左往する軽佻浮薄な人間葉公、そして哀公ということになる。少なくとも「葉公好龍」とはそういうまやかしの、みてくれ人間の側面を衝いた警句として解釈してよいだろう。

『詩経』の句は「小雅（魚藻之什）」隰桑四章章四句の最後の二句である。いま『鄭箋』に依って句意を繙いてみよう。

隰桑は幽王を刺るなり。小人位に在り、君子野に在り。君子に見え心を尽くして以て之に事へんことを思ふなり。

隰桑阿たる有り、其の葉難（だ）たるあり。
既に君子を見る、其の楽しみや如何。
隰桑阿たる有り、其の葉沃たるあり。
既に君子を見る、云（ここ）に何をか楽しまざらん。
隰桑阿たる有り、其の葉幽たるあり。
既に君子を見る、徳音孔膠たり。
心にや愛（いとお）しまん、遐（はるか）に謂（つとめ）ざらんや。
中心之を藏（よみ）すれば、何の日にか之を忘れん。

〔箋に謂ふ。藏は善なり。我が心此の君子を善すれば、又誠に忘る能はざるなり。孔子曰く、之を愛すれば能く労（いたは）ることなからんか。焉（これ）に忠なれば能く誨（さと）すことなからんか。〕

子張はこの二句を依りどころに自己の見解の正当性を裏付けている。在野の秀れた士を見い出し取りたてる明察を持った君主がいない、と。

恐らくこの両者は共に「作り話」であろうが、そのいわんとするところは今や明確になった。ふだんはもっともらしい振る舞いをし

て評判高い「君主」も、いざ真実に直面するとなすすべを知らずうろたえ、自己の暗愚ぶりを露呈してしまうということのようである。

二

『論語』の中に登場する葉公はどんな人物として描かれているであろうか。次の三条を、主として新注を参照しながらその人物像を探ってみよう。

○葉公問孔子於子路。子路不對。子曰、女奚不曰、其為人也、発憤忘食、楽以忘憂、不知老之将至云爾。（述而第七）

〈通釈〉葉公が孔子について子路に尋ねた。だが子路は黙然として答えない。のち孔子はそのことを聞いて次のように言った。お前はどうしてこう言わなかったのかね。その人となりは、発憤して食を忘れ、楽しんでは憂いを忘れ、そろそろ年老いてしまうということも知らぬげであるよというふうに。

古注（魏、何晏『論語集解』）の割注はこうである。孔安国曰く、葉公、名は諸梁、楚の大夫なり。菜を葉に食み、公と僭称す。（子路の）対へざるは、未だ答ふる所以を知らざればなり。

子路が答えなかったのは、どういう風に答えればよいか分からなかったからであると、どちらかと言えば子路の方に責任があるとみなす見解である。

ところが新注（朱熹『論語集注』）では、子路が対えなかったのは質問の仕方に問題があったからだと、責任を葉公に転稼する。葉公孔子を知らず、必ず問ふ所に非ずして問ふ者あり。故に子路対へず。抑も亦聖人の徳、実に未だ名言し易からざる者を以てならんか。そもそも聖人の仁徳は本来ことばにして表現しにくいものであるが、孔子を知らぬ葉公の問い方にこそ問題があったのだとする。そして後半部分の注は次のように孔子を至高の聖人として祭りあげたべたべたの賛辞となっている。

未だ得ざれば即ち発憤して食を忘れ、已に得れば則ち之を楽しんで憂ひを忘る。是の二者を以て俛焉として日々孳たる有り、而して年数の足らざるを知らず。但だ自ら其の学を好むの篤きを言ふのみ。然るに深く之を味わへば則ち其の全体の至極、純も亦已まざるの妙、聖人に非ずんば及ぶ能はざる者有るを見る。蓋し凡そ夫子の自らを言ふ類此くの如し。学ぶ者宜しく思ひを致すべし。

○葉公問政。子曰、近者説、遠者来。（子路第十三）

〈通釈〉葉公が（孔子に）政治について問うた。孔子答えて、近隣にある者はその恩沢を受けて悦び、遠方にある者はその風を聞いて慕い寄ってくる、そんな形が理想の政治と言えようか。（新注。其の沢を被むれば則ち説び、其の風を聞けば則ち来る。然らば必ず近き者は説び、而る後遠き者来るなり。）

『孔子家語』（魏、王肅撰）にはこの条を補足する次の文がある。

――夫れ荆の地は広くして都狭く、民に離心ありてその居に安んずるなし。故に政は近きを悦ばせて遠きを来たすに在りと曰へり。（弁政第十四）楚国は土地が広大なわりに首都が狭く貧弱で、国民の心は王から離れその居所に安住しようとしない。故に政は近きを悦ばせ、遠きを招きよせるに在りと言ったのである。

○葉公語孔子曰、吾党有直躬者。其父攘羊、而子證之。孔子曰、

吾党之直者、異於是。父為子隠、子為父隠。直在其中矣。（子路第十三）

〈通釈〉葉公が孔子に話しかけて、「わたしの村に正直者の直躬という者がおります。その父が迷いこんだ羊をねこばばしてしまったのを、息子が役所に訴えて出ました。」孔子はこれに対して、「私共の村では正直というのはそれとは異なっています。父親は子供のために隠してやり、子供は父親のために隠して庇ってやります。その中にこそ真の正直さというものがあります。」と言った。

有名な直躬の原話である。いま、その本質論議は拙論(注)に譲り、葉公に焦点を絞って究明を続けよう。

古注。葉公此の子を以て直行なりと為し孔子に誇るなり。……孔子此を言ひ以て葉公を拒むなり。葉公、父を証するを以て直と為す。江熙云ふ、葉公聖人の訓(をし)えを見て動もすれば隠諱（いみきらって隠す）することあり。故に直躬を挙げ、此言を以て儒教を毀訾し中国に抗衡（はりあう）せんと欲す。夫子之に答ふるの辞正にして義切なり。荆蛮の豪其の誇を喪なへり。

荆蛮の豪葉公が中国にはりあおうとして持ち出したのが直躬の話である。これに対し孔子がその邪説を見事に粉砕したという。葉公は向う気の強い田舎大名として印象づけられている。

三

『春秋左氏伝』に記された葉公は、花も実もある最高の執政者・軍事長官として我々の前に立ち現れる。葉公の登場個所を列挙しつつその人物像を浮き彫りにしていこう。

定公五年秋、呉・楚・秦の軍隊が入り乱れて攻防をくり返す中で、葉公の弟后臧が母を呉の国に見捨てて国に逃げ帰る事件が起った。葉公はその弟を義とせず終生自眼視しつづけたという。

○葉公諸梁之弟后臧従其母於呉、不待而帰。葉公終不正視。（注。諸梁司馬沈尹戌之子葉公子高也。呉入楚獲后臧之母、楚定、臧棄母而帰。）

生みの母を置き去りにして逃げるような弟を決して許そうとしなかった葉公の強い義の信念を伺わせて余りある話である。

哀公四年夏の條では、当時の楚軍の一指揮官としての葉公の活躍ぶりが垣間みえる。

○楚入既克夷虎、乃謀北方。左司馬販、申公寿余、葉公諸梁致蔡於負函、致方城之外於繒関。曰、呉将泝江入郢、将奔命焉。為一昔之期、襲梁及霍。（楚の人はそれまでに夷虎を平げたので、今度は北の方に目をつけた。左司馬販(はん)・申公寿余(じゅよ)・葉公諸梁が蔡の人を負函に、方城の外の人を繒関(そうかん)に集め、「呉が江をさかのぼって郢(えい)に攻め入ろうとしているから、すぐに王の命に従って欲しい」と言い聞かせておき、ある晩に急に命をくだして、翌日に梁と霍(かく)とを襲った。）

哀公十六年（B・C479）、孔子逝世。その年、楚国で起った〔白公之乱〕の記述を辿る中で我々は秀れた指導者としての面目躍如たる葉公像を明瞭に把握することができる。

白公勝は楚の平王の孫、太子健の子。幼にして呉に在り、令尹子西に召し還されて白公となる。後、乱を為し、子西・子期を朝に殺し、恵王を劫かす。葉公子高に討たれ、山に奔って縊死する。

子西が葉公の忠告を聞き入れず太子健（子木）の子勝を召し還し

白公としてとりたてるくだりはこうである。

○――其子曰勝、在呉。子西欲召之。葉公曰、吾聞勝也詐而乱、無乃害乎。子西曰、吾聞勝也信而勇、不為不利、舎諸辺竟使衛藩焉。葉公曰、周仁之謂信、率義之謂勇。吾聞勝也好復言、而求死士殆有私乎。復言非信也、期死非勇也。子必悔之。弗従召之、使処呉竟為白公。

〈通釈〉――その子は勝といって呉にいた。楚の令尹子西は勝を呼び戻そうと思ったが、葉公子高がいうには、「わたしの聞いた所では勝はうそつきで乱暴者だそうです。招き還しては楚のためにならぬのでは。」子声は言った、「わたしの聞いたところでは勝は信義にかたく、勇気に富んだ男だそうだ。きっとためになる。呼び戻して国境に置き防ぎをさせたい。」葉公が言う、「仁に親しむこれを信といい、義を行うこれを勇と謂う。ところが勝はただ約束を重んずるばかりの、何でも死んでみせるという男が好きなのだそうだ。これは私心を抱いている証拠だ。約束を重んずるだけでは信義とは言えず、死んでみせるというだけが勇気なのではない。あなたはきっと後悔されますよ。」ところが子西は聞き入れずに勝を招き、呉との国境に住まわせ白公に任じた。

秋、七月、白公は乱を起し子西を朝廷で殺し、恵王を脅かした。子西は袂で顔を覆って死ぬ。その時葉公は蔡にいた。不幸にして予見が的中してしまったわけだが、叛乱平定のため都へ攻め入ろうと気勢をあげる人々を制しながら葉公は、「わたしは聞いている。危なっかしい手で運を狙う者は欲にきりがないそうだ。偏頗なことをすればきっと味方は離れる」と言ってチャンスを待った。

時が至りいよいよ白公を攻めることになる途上、行き交う国人が葉公に願い事をする状況がまた面白い。葉公の人柄、国人らの信頼感、両者の交流の様子を如実に表現しているからだ。

○葉公亦至。及北門或遇之曰、君胡不冑。国人望君如望父母焉。盗賊之矢若傷君、是絶民望也。若之何不冑。乃冑而進。又遇一人曰、君胡冑。国人望君如望歳焉。日日以幾。若見君面、是得艾(安)也。民知不死、其亦夫有奮心猶将旌君以徇於国。而又掩以絶民望、不亦甚乎。乃免冑而進。

〈通釈〉そこへ葉公もやって来た。葉公が都の北門にさしかかった時、ある人が出くわして言った。「あなたは何故冑を召されないのですか。都の人々は慈しみ深い、父母を待つ思いであなたをお待ちしております。もし賊の矢が傷つけでもしたら皆の望みも絶たれます。どうして冑を召されないのですか。」そこで葉公は冑を覆って進むことにした。ところへ又一人が出会って言った。「あなたはどうして冑など覆っていらっしゃるのですか。都の人々は秋の実りを待ちわびる思いでお待ちしております。毎日おいでを願っていました。もしお顔を見たらどんなに安心いたしましょう。これで助かったと知れば誰もが奮いたって、あなたを目じるしに国のために身命を抛つことでしょう。それだのにお顔をかくして民に喜びを与えようとなさらないのはひどいではありませんか。」そこで今度は冑を脱いで進むことにした。

途中、手兵を率いて白公に味方しようとやって来た箴尹(いん)固を説得し、逆に国人と共に白公を討たせる。白公は山に逃げ込んでくびれ果てる。加担者は捕われて殺され或いは国外へ逃亡する。

かくして平定なった暁に、葉公は令尹・司馬の二役をつとめ、その後、子西の子寧を令尹に、子西の弟子期を司馬にならせて、自分

は葉に引っ込んだのである。

以上は葉公が当時いかに民心を得ていたかを示すユニークなエピソードであるが、哀公十七年伝にはこの「白公の乱」の後日談が次のように語られ、そこでも葉公の、大事に際しての判断の正確さが二件にわたって記録されているのである。

楚の白公の乱のとき、陳の人はその蓄えをたのみにして楚を侵したのだが、やがて楚が安らいでから、楚の人は（報復して）陳の麦を奪おうとした。楚子はその軍を誰に率いさせようかと大師子穀と葉公諸梁に相談した。

子穀が言う。「右領差車と左史老はふたりとも令尹と司馬を助けて陳を伐ったことがあります。あの者共を使ったらよろしいでしょう。」

子高が言う。「将の身分が低いと、人々が悔って命令に従わないと困る。」

子穀は言った。「観丁父は鄀（ちゃく）の人で捕虜になっていたのに、武王はこれを将軍にした。そして州・蓼を降し、随・唐を従え、広く蛮地を取り広げました。また彭仲爽は申の人で捕虜になっていたのを、文王が令尹に取り立てたので、そののち申・息は県になり、陳・蔡も臣になり、領地を汝水まで延ばしました。役目が物をいうのです。身分の卑しいのが何でしょう。」

子高は言った。「しかし天命というものがあってごまかしはきかない。令尹子西も陳には心のこりがあったことだから、天がもし陳を滅ぼす心ならば、令尹の子にこそ力を貸すであろう。わが君には今度だけは右領・左史はお使いになりませんように、あのふたりは身分の低い所は鄀・申の捕虜に似ておりますが、徳では比べものにならぬかと思われます。」

王は卜を立ててみた。すると武城の尹（子西の子公孫朝）が吉と出た。これに軍を率いさせ陳の麦を取った。陳の人は防いだが敗れ、楚は勢いに乗って陳を囲んだ。秋、七月己卯、楚の公孫朝が軍を率い陳を滅ぼした。

王は葉公と相談の上、だれと名ざしせずに卜を立ててみて、（王の弟）子良を選び令尹にしようとした。

沈尹朱が（卜して）言う、「吉。運が望みを越えております。」

すると葉公が言った。「王子であって宰相になり、しかも望みに越えるとあれば、この上何をすることになろう。」

のち改めて卜を立て（子西の子）子国に定めて令尹とした。

葉公の国政における敏腕ぶり、領土拡大に奔走し着々と成果をあげる有能さを哀公十九年の次の条文でしめくくることにしよう。

○秋、楚沈諸梁伐東夷。三夷男女及楚師盟于敖。（秋、楚の沈諸梁が（越に報復して）東夷を伐った。三夷の男女は楚の軍と敖（ごう）で盟った。注。三夷は越に従う三種の夷。敖は東夷の地。男女とあることより、夷では女性も政治上の力を持っていたことがわかる。）

四

『礼記』緇衣篇に記されている葉公の謹厳実直ぶりを見てみよう。

○葉公之顧命曰、毋以小謀敗大作、毋以嬖御人疾莊后、毋以嬖御士疾大夫卿士。

（注）葉公は楚の県公、葉公子高なり。死に臨んで書を遺すを顧命と曰ふ。小謀は小臣の謀なり。大作は大臣の為す所なり。嬖御の人とは愛妾なり。疾も亦非なり。荘后は適夫人、斉荘（容儀を斉えつつしむ）して礼を得る者なり。嬖御の士とは愛臣なり。荘士も亦士の斉荘して礼を得る者、今の大夫卿士たり。

〈通釈〉葉公の遺言書に言う。小臣の謀りごとを以て大臣の所為を損ってはならぬ。便嬖・愛妾を以て適夫人を非難してはならぬ。側近の愛臣で以て卿大夫士を非難してはならぬ。

子曰、大人不親其所賢而信其所財、民是以親失而教是以煩。

（注）親失はるとは、其の当に親しむべき所を失ふなり。教え煩なりとは、財を信ずるに由ればなり。財者は一徳無きなり。

詩云、彼求我則如不我得、執我仇仇、亦不我力。

（注）言ふこころは、君始め、我を求むるに、我を得ざるを恐るるが如し。既に我を得れば、我を持すること仇仇然として堅固ならず。又我を用ふるに力めず。是れ我を親信せざるなり。

孔子は葉公の遺言を是とし、その上に立って評言している。言うまでもなく『詩経』の「お墨付き」も、葉公の言を多としてのことである。

最後に『荀子』の非相篇を解読しつつ、中に挿入されている葉公の「風格」を抽出して、その人品のすばらしさを跡づけてみよう。

非相の相とは視るということである。其の骨状を視、以て吉凶貴賤を知るなり（『荀子簡釈』の注による。以下同じ）。妄誕者（ペテン師）多く此を以て世を惑はし、時人或いは其の状貌を矜（ほこ）りて務実（内容）を忽がせにす。故に荀卿此篇を作り之を非（そし）るなり。非は違、譏なり。非相とは即ち相術に反対し、譏譴して之を排斥する意味である。

○相人、古之人無有也、学者不道也。

古者有姑布子卿、今之世梁有唐挙、相人之形状顔色而知其吉凶妖祥。世俗称之、古之人無有也、学者不道也。

〈通釈〉人相を視るということは昔の人の問題にしなかったことで、学問に携わる者の口にしないところである。むかし姑布子卿（春秋、鄭の人。字、子卿。孔子と趙襄子の人相をみたことがあるという。）という者があり、最近では梁に唐挙という者（戦国時代の人。魏の宰相となった李兌（りたい）や秦の宰相となった蔡沢の人相をみたという。）がいて、人の形状や顔色をみてその吉凶禍福を予言した。世間ではそれをほめそやすが、昔の人の問題にしなかったことで、学問に携わる者の口にしないことである。

故相形不如論心、論心不如択術。形不勝心、心不勝術。術正而心順之、則形相雖悪而心術善、無害為君子也。形相雖善而心術悪、無害為小人也。君子之謂吉、小人之謂凶。故長短小大美悪形相、非吉凶也。古之人無有也、学者不道也。

〈通釈〉だから容貌をみて占うことは心を論ずることに及ばないし、心を論ずるのは行為のあり方によって判断するのに及ばない。容貌は心にかなわないし、心は実際行動にかなわない。実際行動が正しいなら心はそれに順って真っ直ぐである。だから人相が悪いとされても心や行為が善ければ君子とみなしてよい。人相が善いとされても心と行為が悪ければ小人とみなしてよいのだ。君子となる方法であれば吉といい、小人となる方法であれば凶という。だから形状の長短小大美悪は吉凶に関係がない。昔の人の問題にしなかった

ことであり、学問に携わる者の口にしないことである。

蓋帝堯長、帝舜短。文王長、周公短。仲尼長、子弓短。昔者衛霊公有臣曰公孫呂、身長七尺、面長三尺、焉広三寸、鼻目耳俱大、而名動天下。楚之孫叔敖、期思之鄙人也。突禿長左、軒較之下、而以楚霸。

〈通釈〉思うに帝堯は長身で帝舜は短身、文王は長身で周公は短身、孔子は長身で子弓（仲弓か）は短身であった。むかし衛の霊公の臣下に公孫呂というものがおり、身長は一尺、顔は長さ三尺幅三寸、鼻・目・耳がどでかいという容貌であったが、名声は天下にとどろいた。楚の孫叔敖は期思の田舎人で、突き出た禿頭、左手が右手より長いという奇形であったが知謀に秀れ、王の馬車の下で働き楚を諸侯の霸たらしめた。

葉公子高、微小短瘠、行若将不勝其衣然。白公之乱也、令尹子西司馬子期皆死焉。葉公子高入拠楚、誅白公、定楚国、如反手爾、仁義功名蓋於後世。

〈通釈〉葉公子高は背が低く痩せぎすで、歩くにも着物がだぶだぶという態であった。ところが白公の乱が起り、宰相の子西や軍事長官の子期が皆死んでしまったのに、葉公子高は都に入り楚の民を後ろ楯に白公を誅し楚国を安定させたが、恰も手のひらをかえすようであった。その仁義の徳や功名は後世にまでたたえられている。

故士不揣長、不楔大、不权重、亦将論志乎爾。長短大小、美悪形相、豈論也哉。

〈通釈〉だから士たるものは背の高さとか身体の大きさ、体重の重さとかは問題でなく、ただ心志のいかんによって評価される。形状の長短大小や容貌の美醜などどうして論ずる必要があろうか。

以上を要するにこの議論は占いや観念による判断を排斥し、あくまで現実の行為如何によって論議を進めようとする荀子の思考形式もさることながら、その人によって賞賛された葉公がこれにひけをとらぬ思惟力の持ち主であったことを如実に物語るエピソードになっていることである。なりは小さいが政敵どもを向うにまわして堂々の議論を展開する（前節のような）状況が彷彿としてくるではないか。

むすび

『後漢書』崔駰伝（宋、范曄撰）に、時の粛宗帝が侍中の竇憲に向い崔駰のことを尋ねた際、「そちが班固を愛でて崔駰を忽せにするのは、恰も葉公の龍を好む類である。」と述べられた文がある。崔駰の噂を耳にし会ってみたいとは思うものの、いざ本物に対面するとなるとなんとなく尻ごみしてしまうではないかととがめているようである。

このことは後漢の時代にすでに「葉公好龍」の諺が宮廷（そして恐らく士大夫階級レベル）で通用しており、その時の葉公の人となりは一・二節でみたようなどちらかといえば否定的な軽佻浮薄な人間として捉えたもののようである。

そうすると、三・四節でみた質実剛健で人民に慕われる優秀な執政者としての葉公と一体どこでその逆転劇が起ったのであろうか。

この、恰もジキルとハイド的正反対の葉公評価の由来を解く鍵は、二節の後半にある直躬の話の中で江熙が注記した議論の中にあると

思う。つまり、儒教を毀り中国に抗う目的で発せられた葉公の直躬の話に対し、孔子が正義の言辞で断固排撃された。そして葉公はとどのつまりは田舎の小役人風情に格下げさせられてしまったのだ。アンチ儒家思想、この一点において葉公は『論語』の箇条の中でさげすまれ、あげくのはてに「葉公好龍」の滑稽な主人公にまで祭り挙げられてしまった。その後の評価が儒教思想の国教化の中でどちらのコースで固まっていったか、いまさら述べるまでもあるまい。あな畏しや。

（注）拙者「直躬」論　一九九〇年度本紀要記載。